台大日本語文研究第 51 期
2026 年 06 月，頁 33-55
2026-03-25 收稿，2026-05-30 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.202606_(51).0002

《堪忍記》中的《太平記》運用

陳羿秀*

摘要

浅井了意（？～1691）一方面是仮名草子作家，同時也是真宗大谷派的僧侶。他的著作範圍廣泛，從古典注釋到佛書皆有涉及，是仮名草子代表性的作家。代表作包括名所導覽書《東海道名所記》（刊於萬治末年左右），以及引領怪異小說流行的先驅之作《伽婢子》（1666 年刊）等。他的女訓物著作依時間順序排列，有《堪忍記》（1659 年刊）、《本朝女鑑》（1661 年刊）等，其中最受注目、研究最為豐富的是仿效中國《列女傳》編成的《本朝女鑑》。與《本朝女鑑》相比，有關了意其他女訓物的研究不得不說仍嫌不足。因此，本文聚焦於他最初的仮名草子作品《堪忍記》中的〈女鑑〉部分。

《堪忍記》是了意所著共八卷八冊的仮名草子作品，屬於他創作時期中相當早期的作品。本作仿效教訓書《堪忍弁義抄》（1651 年刊），內容主要以明代顏茂猷所著《迪吉錄》為典據。本書第一至第五卷為關於人倫生活基礎、以「堪忍」為主題的和漢逸聞。而從第六至第八卷開始，目錄題目標示為〈女鑑〉，內容則轉為女訓故事。仔細檢視〈女鑑〉的語彙後可發現，其中部分用語來源於《太平記》。

本論文以《堪忍記》〈女鑑〉為主要研究對象，指出其與《太平記》之間的關聯。透過深入探討《太平記》文句在《堪忍記》中的作用，以期闡明了意的創作手法。

關鍵詞：堪忍記、浅井了意、女訓物、太平記、假名草子

* 靜宜大學日本語文學系副教授

臺灣大學學術期刊資料庫

The Use of the *Taiheiki* in *Kanninki*

Chen, Yi-Hsiu*

Abstract

Asai Ryoi (?-1691) was a writer of *kanazoshi*. His works in the instructional texts for women include *Kanninki* (1659) and *Honcho jokon* (1661), arranged in chronological order. Among these, the most notable and the one with the most extensive prior research is *Honchojokan*. In contrast, research on Ryoi's other instructional texts for women remains insufficient. Therefore, this paper focuses on the "Onna Kagami" section of *Kanninki*, his earliest *kanazoshi*.

Kanninki primarily draws upon Yan Mouyou's Ming-dynasty *Tekkitsuroku* as its main source. Volumes 1 through 5 consist of various Japanese and Chinese anecdotes concerning *kannin*. However, from volumes 6 to 8, the chapter headings change to "Onna Kagam. A close examination of the vocabulary in "Onna Kagami" reveals that part of its terminology derives from the *Taiheiki*.

This paper takes the "Onna Kagami" section of *Kanninki* as its main subject and identifies its relationship with the *Taiheiki*. By exploring the role played by *Taiheiki* expressions within *Kanninki*, it seeks to clarify Ryoi's creative methods.

Key words: *Kanninki*, Asai Ryoi, Instructional texts for women, *Taiheiki*, *kanazoshi*.

* Associate Professor, Department of Japanese Language and Literature, Providence University

臺灣大學學術期刊資料庫

『堪忍記』における『太平記』利用

陳羿秀*

要旨

浅井了意（？～1691）は仮名草子作家である一方で、真宗大谷派の僧侶でもある。その著作は古典の注釈から仏書まで多岐に渡り、仮名草子の代表的な作家である。代表作は名所案内の『東海道名所記』(万治末年頃刊)や怪異小説流行の先駆けとなった『伽婢子』(1666刊）などである。彼の女訓物の著作は、時系列順に並べると、『堪忍記』(1659刊)、『本朝女鑑』(1661刊）などがあるが、中で最も注目され、先行研究も多いのは中国の『列女伝』の構成を模倣した『本朝女鑑』であるが、そのほかの女訓物に関する研究はまだまだ不十分と言わざるを得ない。そこで本稿は彼の最初の仮名草子でもある『堪忍記』「女鑑」に着目する。

『堪忍記』は8巻8冊仮名草子であり、了意の仮名草子の作品の中でかなり初期に属する作品である。本作は教訓物の『堪忍弁義抄』（1651刊）に倣い、内容は明の顔茂猷著『迪吉録』を主な典拠としたものである。本書は巻１～５は人間生活の基礎となる堪忍に関する和漢の逸話であるが、巻６～８からは目録題が「女鑑」とあり、女訓の話となった。その「女鑑」の語句を精査すると、用語の一部が『太平記』によることが判明した。

本稿は『堪忍記』「女鑑」を主な研究対象として、それと『太平記』との関連性を指摘する。『太平記』の文言が『堪忍記』における役割を掘り下げることによって、了意の創作手法を明らかにしたい。

キーワード：堪忍記、浅井了意、女訓物、太平記、仮名草子

* 静宜大学日本語学科准教授

臺灣大學學術期刊資料庫

『堪忍記』における『太平記』利用

陳羿秀

一、はじめに

浅井了意(？～1691)は仮名草子作家である一方で、真宗大谷派の僧侶でもある。その著作は古典の注釈から仏書まで多岐に渡り、仮名草子の代表的な作家である。代表作は名所案内の『東海道名所記』（万治末年頃刊）や怪異小説流行の先駆けとなった『伽婢子』（1666刊）などである。[1]彼の女訓物の著作は、時系列順に並べると、『堪忍記』（1659 刊）、『本朝女鑑』（1661 刊）、『錦木』（1661 刊）、並びに『三綱行実図』（1661?）である。中で最も注目され、先行研究も多いのは中国の『列女伝』の構成を模倣した『本朝女鑑』である。それに比べ、了意のほかの女訓物に関する研究はまだ不十分と言わざるを得ない。そこで本稿は彼の最初の仮名草子である『堪忍記』「女鑑」に着目する。

『堪忍記』は了意著 8 巻 8 冊で、荒木利兵衛板を初板とすべき仮名草子であり、了意の仮名草子の作品の中でかなり初期に属する作品である。本作は教訓物の『堪忍弁義抄』（1651 刊）に倣い、内容は明の顔茂猷著『迪吉録』を主な典拠としながらも、『事文類聚』（1246 成立）や『明心宝鑑』（1393 成立）などの善書からも取材したものである。本書は巻１～５は人間生活の基礎となる堪忍に関する和漢の逸話であるが、巻６～８からは目録題が「女鑑」とあり、女訓の話となった。[2]この 3 巻は後から付け加えられたという指摘[3]もある。その語句を精査すると、用語の一部が『太平記』（室町時代成立）によることが判明した。

---

1 浅井了意の紹介は、日本古典文学大辞典編集委員会編集（北条秀雄執筆）『日本古典文学大辞典』第 1 巻（岩波書店、1983、p.36）による。

2 『堪忍記』の紹介は、日本古典文学大辞典編集委員会編集（小川武彦執筆）『日本古典文学大辞典』第 2 巻（岩波書店、1984、p.84）による。

3 朝倉治彦、深沢秋男編（1997）「堪忍記 解題」『仮名草子集成』第 20 巻、東京堂出版、p.307。

臺灣大學學術期刊論文資料庫

『堪忍記』に関する先行研究は、これまで主として各話の典拠が和漢故事に求められること[4]や井原西鶴の浮世草子との関連性[5]、更に近年では、日本善書としての『堪忍記』の役割に関する考察[6]に集中してきた。しかし、その文言と『太平記』との関係についてはまだ十分に論じられていない。

そこで本稿では、『堪忍記』「女鑑」を主たる研究対象として、それと『太平記』との関連性について検討する。とりわけ『太平記』の文言が『堪忍記』の叙述においてどのような役割を果たしているのかを考察することで、了意の翻訳・創作手法の一端を明らかにしたい。

二、了意作の先行研究－『太平記』との関わりについて

了意と軍書との関係については、彼が『将軍記』（1664 刊）や『首書太平記』（1680 刊）をはじめとする数多くの軍書を著していることが知られている。また、その怪異小説である『伽婢子』についても、先行研究[7]によって、『甲陽軍鑑』（江戸初期成立）等の軍書との関連性が明らかにされている。

その上、了意作と『太平記』との関わりについて、彼のもう一つの怪異小説である『狗張子』（1692 刊）が『甲陽軍鑑』や『太平記』巻 11「越中守護自害事付怨霊事」、巻 23「大森彦七事」や巻 27「天

4 『堪忍記』の典拠研究は、主に小川武彦（1976）「『堪忍記』の出典」上の一」『近世文芸研究と評論』10 号、早大文学部暉峻研究室、小川武彦（1977）「『堪忍記』の出典」上の二」『近世文芸研究と評論』13 号、早大文学部暉峻研究室と花田富二夫（2003）「『堪忍記』とその周辺」『仮名草子研究―説話とその周辺―』新典社研究叢書 151、新典社、花田富二夫（1997）「浅井了意の文事―『堪忍記』を中心に―」『近世文学俯瞰』、汲古書院による。

5 吉江久彌（1990）『西鶴文学とその周辺』新典社研究叢書 33、新典社。

6 董航（2019）「浅井了意における孝道論:『堪忍記』を中心に」『成蹊国文』52 号、成蹊大学文学部日本文学科や董航（2024）「浅井了意の仮名草子が語る日本善書文化の展開―『堪忍記』『浮世物語』の流伝を例に―」『日本文化学報』第 102 輯、韓国日本文化学会などである。

7 『伽婢子』と軍書の関わりについては、江本裕（2000）「了意怪異談の素材と方法」『近世前期小説の研究』近世文学研究叢書 12、若草書房と冨士昭雄（2011）「浅井了意の怪異小説」『西鶴と仮名草子』笠間書院などによる。

臺灣大學圖書館資料庫

下妖怪事付清水寺炎上事」「田楽事付長講見物事」等との影響関係について指摘されている。[8]

『狗張子』以外にも、『密厳上人行状記』では、覚鑁上人の受難伝承の一つである『密厳上人行状記』巻下 47「難防入定」の典拠に、『太平記』巻 18「高野與根来不和之事」が挙げられている。[9]

更に、『本朝女鑑』では、『太平記』が「勾当内侍」をはじめとする女性説話が多く収められているため、全部で 14 話を『太平記』から仰いでいる。[10]その中には、先に挙げた『太平記』巻 11「越中守護自害事付怨霊事」を典拠とする話も含まれている。

『太平記』は楠木正成や新田義貞など多くの武将が死去するため、その怨念が怪異として現れる話が数多く描かれている。『堪忍記』「女鑑」における了意の『太平記』利用も、その一部がこうした怪異譚から摂取したのである。また、「女鑑」前後の記述を見ても、典拠である『太平記』の文脈をある程度踏まえているように思う。更に、『太平記』には中国故事や仏教的な因果応報の思想も含まれているが[11]、『堪忍記』には、それらから文言を摂取した痕跡も確認できる。本稿ではこうした特徴が最も顕著に認められる『堪忍記』「女鑑」を中心に検証し、次節以下、『堪忍記』がどのように『太平記』を利用しているのかを詳しく考察していく。

---

8 『狗張子』と軍書との関連については、冨士昭雄（2011）「浅井了意の怪異小説」『西鶴と仮名草子』笠間書院と土屋順子（1999）「『狗張子』考―巻二―五「形見の山吹」を中心に―」『大妻国文』第 30 巻、大妻女子大学国文学会などによる。

9 木村廸子（2015）「浅井了意『密厳上人行状記』について：典拠・執筆姿勢・影響」『近世文芸』101 号、日本近世文学会。

10 『本朝女鑑』と『太平記』との繋がりは、主に濱田啓介（1993）「刊行の為ための虚構の発生―本朝女鑑の虚構」『近世小説・営為と様式に関する私見』、京都大学学術出版社と大久保順子（2021）「『本朝女鑑』と軍記―女性逸話の形成と展開の関して」『文藝と思想』第 85 号、福岡女子大学による。

11 『太平記』の中国古典利用は、小秋元段（2013）「『太平記』における歴史叙述と中国故事」『日本学研究』23、北京日本学研究中心などに詳しい。

臺灣大學圖書館

三、『堪忍記』の『太平記』利用（１）

『堪忍記』の『太平記』利用について、はじめに巻 6－21－2「滑州の狗頭新婦が事」から確認したい。河南酸棗県に、極めて不孝な嫁がいた。あるとき、夫が留守中に、嫁は糞を食事に混ぜて盲目の姑に食べさせた。姑はそれに気づき、食べ残しを息子に見せた。すると、息子が涙を流して嫁の親不孝を嘆いている最中、天井から熊のような黒い手が現れ、嫁の頭を掴んで持ち上げた。息子は恐怖のあまり、ひとまず母を抱えて家の外へ避難した。その後暫く家に戻ると、嫁の手足や衣装は元のままであったが、頭だけが犬の頭に変わっていたという話である。その嫁の頭が熊のような黒い手によって持ち上げられた場面について、『堪忍記』では次のように描かれている。

> 子ハ、これを見るより。涙を流して。さて、なさけなき事を。いたしける者かな。両眼なけれバとて。かゝる物うきめ・見せける事よとて。声うちあげて、なきける所に。天井より、熊の手のことくなる。くろき手をいだし。新婦が、かうべを、ひつさげて、あがる　あら、かなしという声。のミ、のこりて、見えず。[12]

原典の『迪吉録』女鑑孝逆報「酸棗婦雷換狗頭」[13]の当該箇所に、

> 其子仰天大哭、有頃、雷電発、若有人截婦首、以犬続之、（其の子天を仰ぎて大哭して、有る頃、雷電発、有る人婦の首を截り、犬（の首）を以て之を続ぐ）[14]

更に、同じ典拠を扱う中村藤樹作『鑑草』（1647 刊）巻 1「孝逆之報」の関係する箇所を見ると、

---

[12] 『堪忍記』の本文は、以下、朝倉治彦、深沢秋男編（1997）『仮名草子集成』第 20 巻、東京堂出版による。p.238-239。

[13] 小川武彦（1976）「『堪忍記』の出典」上の一」『近世文芸研究と評論』10 号早大文学部暉峻研究室などによる。

[14] 『迪吉録』の本文は、以下、国立公文書館所蔵『迪吉録』明崇禎 4（1631）年版（請求番号:子 077-0009、国立公文書館 DA〔https://www.digital.archives.go.jp/img/4431511〕）による。引用にあたり適宜句読点などを補い、また振り仮名については基本的に省略した。以下、翻刻については同様とする。

臺灣大學圖書館 資料庫

其子、あきれはてゝ、天にあふいて、大に、なげき、さけびけり。俄に、かミなり、すさまじく、いなひかり、はなばなしかりけるが、その、いなびかりのうちより、人、来りて、よめか頸を、きると見えしか、[15]

とある。『堪忍記』も『鑑草』も『迪吉録』を和訳した内容だが、両作の下線部を見比べると、『鑑草』の「人、来りて、よめか頸を、きると見えしか」が原典の「若有人截婦首」（有る人が来りて、婦の首を截る）の直訳である。それに対し、『堪忍記』の訳「天井より、熊の手のことくなる。くろき手をいだし。新婦が、かうべを、ひつさげて、あがる」では、化物が嫁の頭を持って上の方へ移動しようとすることになっており、明らかに原文とは異なる描写である。結論から言うと、これは『太平記』巻 23「大森彦七事」に拠った表現である。

『太平記』の「大森彦七事」は怪異話である。亡霊になった楠木正成が大森盛長（彦七）の宝剣（楠木正成を討った際に得たもの）を奪還しようとして、盛長の元へ次々と化物を送り込むが、下に当該箇所を引用しよう。

コハ何ニト思処ニ自天井熊ノ手の如ナル毛生テ長キ手ヲ指下シテ盛長カ髻ヲ取テ中ニ引さけ破風ノ口ヨリ出ントス[16]

下線部にあるように、『太平記』の化物が盛長の髻を掴んで、そのまま空中に連れ去ろうとする箇所の語句が『堪忍記』のと類似している。

[15] 『鑑草』の本文は、以下、朝倉治彦、深沢秋男編（1993）「『仮名草子集成』第 14 巻、東京堂出版による。p.21。

[16] 『太平記』の本文は、以下、筑波大学図書館マイクロ収集、ル 140‐85・慶長 15 年古活字版（国文学研究資料館マイクロ請求記号：006-0172-002、国書データベース〔https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100027006/〕）による。慶長 15 年古活字版に拠ったのは、前掲の大久保順子（2021）「『本朝女鑑』と軍記―女性逸話の形成と展開の関して」において、同じく浅井了意著『本朝女鑑』の本文も慶長古活字版『太平記』を参照した痕跡が認められたからである。

臺灣大學圖書館

更に、『太平記』の「大森彦七事」は了意の『狗張子』巻 7－2「蜘蛛塚」の典拠にもなっている。[17]山伏の覚円が宿泊した大寺院・大善院に、蜘蛛の妖怪が棲みついていた。ある夜、覚円が寝入っているところへ、突如妖怪が現し、彼に襲い掛かった場面に、

> その間に、天井より、大きなる毛おひたる手を、さし出し、覚円が額をなづ。[18]

下線部にあるように、『太平記』に依拠していることが明らかであり、了意が何度も当該箇所を自著に使用していることがわかる。

以上を踏まえると、了意が『太平記』の怪異性の強めの箇所をうまく『迪吉録』「酸棗婦雷換狗頭」の和訳に挿入することによって、「滑州の狗頭新婦」の不気味さをいっそう際立たせる効果を狙ったのではないか。

また、類似の例として、巻 6－21－5「三人の新婦、不孝故に畜生に成たる事」を挙げよう。延平府に杜氏の 3 兄弟がいた。三人はいずれも嫁を迎えており、その母も健在であった。しかし、3 人の嫁はそろって親不孝で、姑に対してひどく辛く当たっていた。そのため、姑は思い悩み、幾度となく首を括って自殺をしようとした。7 月中旬のある昼間に、突然雷が落ちた。すると不思議なことに、3 人の嫁は皆顔こそ女の顔のままであったが、身体はそれぞれ牛、犬と豚へと変わってしまったのである。その雷が落ちた場面に、『堪忍記』では、

> 七月の末がた・空かきくもり。いかづち、おびたゝしく鳴。いなびかり隙なく。かゝやきけるが。[19]

と見えるが、原典の『迪吉録』女鑑孝逆報「杜婦逆変異類」には、

> 嘉靖辛卯七月中、白昼轟雷一声、秖覚電光紅紫眩目、（嘉靖辛卯七月中、白昼雷一声轟きて、ただ電光紅紫を覚え、目が眩む）

---

[17] 「大森彦七事」は了意の『狗張子』巻 7－2「蜘蛛塚」の典拠になっていることが冨士昭雄（2011）「『伽婢子』と『狗張子』」『西鶴と仮名草子』笠間書院、p.140 による。

[18] 『狗張子』の本文は、以下、朝倉治彦編（1983）『仮名草子集成』第 4 巻、東京堂出版による。p.139。

[19] 同注 12、p.242。

臺灣大學學術期刊資料庫

両者を比較すると、『堪忍記』の和訳は基本原典に沿っているが、囲み線部の「かきくもる」だけは了意によって新たに付け加えられた言葉である。[20]「かきくもる」は空が急に暗くなる、あるいは涙で目の前がぼんやりとしているなどの意味がある。[21]管見の限りでは、「かきくもる」は「空が急に暗くなる」の意味として使われた用例は『枕草子』の「今朝は、さしも見えざりつる空の、いと暗うかき曇りて」[22]のように、単純に空が急に曇り始めた場面が大半である。それに対し、『太平記』の「かきくもる」は、化物や幽霊が出てきたり、天変地異が起こったりする印象的な場面が多く、用例は 6 例にも上る。中でも注目すべきは、『太平記』巻 33「新田左兵衛佐義興自害事」の用例である。新田義興は新田義貞の次男で、知略に富み、状況に応じた機敏な判断力を備えているが、運悪く敵に欺かれ自害してしまった。その後江戸遠江守が新田義興らを滅ぼした功績により、恩賞地を拝領したが、結局江戸が義興の怨霊により殺された。

次に、義興の怨霊が現れた当該箇所を引く。

俄ニ天掻曇リテ雷鳴（イカヅチナリ）、水嵐烈ク吹漲リテ、白波舟ヲ漂ハス。（中略）電（イナヒカリ）行前ニ閃テ、雷（イカツチ）大ニ鳴霆（ハタ）メク。[23]

このように並べると、「かきくもる」のみならず、下線部の雷（イカツチ）をはじめとする複数の箇所まで前掲の『堪忍記』の下線部との合致が見て取れる。ほかにも、『太平記』巻 20「結城入道墮地獄事」に

---

[20] 『鑑草』巻 1 に、当該箇所の和訳も「白昼、俄に空かきくもり、ひとつ、かミなり轟きて、いなつまの光、むらさきに、おひたゝしく、ひかり、眼もくらむはかりなりけるか」とあり、同じく「かきくもり」を使っているが、本話の前後の内容もほかの和訳内容も了意が『鑑草』を参照した痕跡があまり見られないことから、この箇所の「かきくもり」は了意が『鑑草』の和訳を参考にしたとは考えにくい。

[21] 日本国語大辞典第 2 版編集委員会（2000～2002）『日本国語大辞典』第 2 版、小学館（ジャパンナレッジにて閲覧）。

[22] 松尾聡、永井和子校注・訳（1997）『枕草子』『新編日本古典文学全集』18、小学館、p.430。

[23] 前掲の慶長古活字版『太平記』に振り仮名が記載されていないゆえ、引用文の振り仮名は、筆者が国文学研究資料館・寛永 1 年古活字版（国文学研究資料館請求記号：99-18-1～41、国書データベース〔https://doi.org/10.20730/200003071〕）の本文に基づいて付したものである。

臺灣大學圖書館收藏

「月俄ニカキ陰(クモ)リ、雨アラク電(イナヒカリ)シテ、牛頭馬頭ノ阿防羅刹共其数ヲ知ラス」[24]も類似した構文が見られる。そのことから、『太平記』では、「かきくもる」や「いなびかり」などは怪異現象を引き出すためにパターン化された決まり文句であり、それを了意が『堪忍記』に取り込んだのではないか。

更に、了意著とされる『かなめいし』（1663か）「地震ゆりいだしの事」にも、地震発生直前の様子に「かきくもる」が見られ、

> 空かきくもり、塵灰の立ちおほひたるやうにみえて、雨気の空にもあらず、夕立のけしきにもあらず。[25]

これに関して、『新編日本古典文学全集』所収『かなめいし』の当該箇所の頭注に、

> 地震発生前の不気味な雰囲気が印象的。了意は「空かきくもり・・・空の雨気にもあらず」と記すが、実はその日「早旦ヨリ小雨」（吉田神社御広間雑記＜新収日本地震史料＞）。了意の記述と食い違う。とすれば、不気味さを強調するための虚構か。[26]

と記され、『かなめいし』においても、了意が地震前の不気味な雰囲気を引き出すために、「かきくもる」を使用した可能性が指摘されている。

また同様の例として、『堪忍記』における了意による不思議な現象を連想させる効果を狙った『太平記』利用について、『堪忍記』巻７－23－2「まゝ子を責ころしけれバ、幽灵になりて、継母が生け

---

[24] 更に、『太平記』巻７「舩上合戦事」に「俄ニ天カキ曇リ、風吹キ雨降事、車軸ノ如ク、雷ノ鳴事山ヲ崩スカ如シ」、巻23「大森彦七事」に「月俄ニかき曇テ、黒雲一村覆ヘリ、雲中ニ聲有テ」、巻32「直冬上洛事付鬼丸鬼切事并頼光之事」に「俄ニ空掻曇テ、森ノ上ニ物ノ立翔ル様ニ見ヘケルカ」、巻36「大地震并夏雪事」に「俄ニ天掻曇雪降テ、氷寒ノ甚キ事、冬至ノ前後ノ如シ」の例が散見する。「かきくもる」はやはり『太平記』では化物や幽霊が現れたり、天変地異が起こる前触れとして使われている。

[25] 『かなめいし』の本文は、以下、大洲市立図書館矢野玄道文庫所蔵・刊記不明（マイクロ請求記号：364－0204－006、国書データベース〔https://doi.org/10.20730/100227503〕）による。

[26] 谷脇理史・岡雅彦・井上和人校注・訳者（1999）『仮名草子集』『新編日本古典文学全集』64、小学館、p.16。

臺灣大學學術期刊資料庫

る子につきたる事」を取り上げたい。

本話は原典が『妬吉録』女鑑慈残報「徐妻殺前児而已(ママ)児継死」になっている。徐甲は妻に先立たれた後、後妻を迎えた。しかし、その後妻が前妻の子である鉄臼をひどく妬み、ついには彼を死に追いやってしまった。その後鉄臼は怨霊となり、後妻が生んだ子の鉄杵を殺した。その際の様子について、

> 鉄杵、四さいにて、物におそハれたるやうに、俄に啼入て、くるしミ、あらかなし、うたるゝ事のいたく、堪かたし、と、啼さけぶ、その、うたるゝと云所ハ、あをく黶(つしミ)て、[27]

とあるところを、原典の『妬吉録』では、

> 于時鉄杵六歳、腹脹体痛、鬼嫂打之、打処青黶、（その時鉄杵六歳、腹が張り、体が痛む。鬼が嫂之を打ち、打処青黶）

と記している。『堪忍記』の下線部の「黶」に注目すると、「黶」の読み方について、漢字辞典『字通』[28]によると、訓義は「あざ・ふくろ」とされている。なお、『鑑草』の当該箇所に、「怨灵、たゝくと、見えしところハ、青くはれて」[29]とあり、『堪忍記』の読み方とも異なっている。以上のことから、了意が原文の黶をあえて「つしむ」と読ませたことがわかる。ほかに用例が見られないことから、これは了意独自の読み方[30]と考えて差し支えないだろう。

「黛(つし)む」は肌に赤黒い斑点などが出る[31]、という意味であり、管見の限りでは、主に『大般若経字抄』[32]などの仏書に出てくる語彙と思われる。「つしむ」の唯一の物語の用例は『太平記』巻 24「三宅荻野謀叛事付壬生地蔵事」に求められる。本話は地蔵菩薩の霊験譚で、

---

[27] 同注 12、p.263。
[28] 白川静（1996）『字通』平凡社。（ジャパンナレッジにて閲覧）。ほかにも、築島裕編（2007～2009）『訓点語彙集成』汲古書院によれば、「黶」の訓読みは「ハハクソ・フスブ・フスベ」となっており、いずれも了意の読み方と異なる。
[29] 同注 15、p.95。
[30] なお、『堪忍記』の後に刊行された了意の仏書『仏説善悪因果経直解』（1667）巻 4 にも『妬吉録』「徐妻殺前児而已児継死」が収載されているが、「黶」の振り仮名に了意が同じく「ツシム」と付けた。
[31] 同注 21。
[32] 築島裕編（2007～2009）『訓点語彙集成』汲古書院。

臺灣大學學術期刊資料庫

壬生の地蔵菩薩が武蔵国の住人香勾新左衛門高遠の身代わりとなって、お体が所々に鞭のために黒い跡が残っているところに、

地蔵薩埵ノ御身、所々為刑鞭鴛（つしみ）黒、高手小手ニ禁シ其縄未御衣ノ上ニ著タリケルコソ不思議ナレ。

「つしみ」が使用された。了意が鉄杵の鬼に打ち付けられて所々にできた青い痣を地蔵菩薩の痣と重ねて見たのではないか。そうすることで、鉄杵の痣の不思議さをより強めたい意図があると考えられる。

以上に挙げた『堪忍記』における『太平記』利用の例を見ると、了意は『太平記』の中から、怪異話や霊験譚などに出てくる「自天井熊ノ手の如ナル」のような表現や言葉を駆使して、ストーリーの不気味さや不思議さを強くする意図があると読み取れよう。

四、『堪忍記』の『太平記』利用（2）

『堪忍記』の『太平記』利用には、前節のように物語の不気味さを付加するために用いられた例がある一方、それと異なる事例もまた複数認められた。

はじめに、『堪忍記』巻 8－24－7「大和の国弥太郎が妻物語の事」を取り上げる。

本話は典拠不明とされる話である。大和の国みかの原に住む七十歳余りの老夫婦が、袋忠長老を尋ねてきた。しかし、その妻の首元に傷があった。不思議に思った長老がその理由を尋ねると、妻はそれが亡くなった前夫・平六の幽霊に首を食いちぎられた跡であると語った。その訳は、平六が亡くなる前に、妻は彼に対して、自分はこの先決して再婚しないと固く誓っていた。ところが、その誓に反して、現在の夫・弥太郎と再婚してしまったため、平六の怨念による復讐を受けたのであった。本話の末尾では、前夫との約束を守れず再婚してしまった妻への報いについて、了意が次のよう記している。

臺灣大學學術期刊資料庫

されバ。繋念無量劫とて。一念の執着ハ無量劫にも、つきせず、と也。いはんや来世にハ。衆合地ごくに、おちて。大なる石に、身をうちくだかれ。[33]

下線部の「繋念無量劫」は執念をおこすときは、はかり知れない歳月にわたってその苦果を受ける[34]という意味の語である。調べた限りでは、室町時代の物語などに使われた表現と考えられる。当該用語の出典は『新編日本古典文学全集』所収『太平記』の頭注に、『大智度論』とされているが、今のところはそれを確認することができない。[35]

さて『太平記』には、「繋念無量劫」について２つの用例を確かめることができた。巻 37「畠山入道道誓謀叛事付楊国忠事」では、唐玄宗が楊貴妃の形見の言葉などを方士から受けると、その悲しみのあまりに、ついにその年の秋に崩御なさった。唐玄宗と楊貴妃の固く結ばれた契りについて、『太平記』では、

一念五百生、繋念無量劫トイエリ。況ヤ知ヌ世マテノ御契浅カラサリシカハ、死此生彼天上人間禽獣魚蟲ニ生ヲ替テ、愛著ノ迷ヲ離レ給ハシト、罪深キ御契ナリ。

と記されている。「繋念無量劫」のみならず、「況ヤ知ヌ世」までも『堪忍記』の「いはんや来世」と類似している。更に、『太平記』巻 11「越前牛原地頭自害事」では、北國の探題淡河殿は六波羅も滅亡し、敵の軍勢が大勢押し寄せてくるのを見て、妻と共に自害した最後の哀れな場面に、

一念五百生、繋念無量劫ノ業ナレハ、奈利八万ノ底マテモ同シ思ノ炎ト成テ、焦レ給フラント哀也ケル事共也。

と記される。『太平記』では淡河殿夫婦が恋に執着することで、その報いとして、奈利八万ノ底（無間地獄）に落ちて、猛火に身を焼かれる苦しみを味わうことになる。それに対し、『堪忍記』では妻

33 同注 12、p.279。
34 同注 21。
35 長谷川端校注・訳者（1994）『太平記』4『新編日本古典文学全集』64、小学館。p.293。

臺灣大學學術期刊資料庫

が前夫を裏切った報いとして「衆合地獄」に落ちて、大石に潰された苦しみを受けた。両作とも人間の愛情へ執着することで地獄に落ちる記述が見られる。

『太平記』からの直接利用の用例として、もう1つ確認しよう。本例は『堪忍記』「女鑑」の話ではなく、『堪忍記』巻2－11－3「藺相如廉頗将軍か事」の話である。

本話は『廸吉録』官鑑同寅和衷之報「藺相如屈廉頗而功名益著」による。あらすじは次のようである。藺相如は中国戦国時代の趙で活躍した食客である。彼は、大国秦との外交交渉で趙の面目を保った功績により、上卿に昇進した。しかしそのことを快く思わなかった廉頗将軍は彼に強い不満を抱くようになった。その後、藺相如は病気と称して廉頗との接触を避けるようになったため、人々から臆病者と嘲笑された。これに対して、藺相如は自分が廉頗を恐れているのではなく、国内で対立が生じることで、秦に付け入る隙を与えてしまうことを憂えているだと説明した。やがてその事情を人づてに知った廉頗は自らの狭量さを恥じ、藺相如のもとを訪れて謝罪した。

『堪忍記』において、藺相如は人々に自分の真意を説明した内容が次のように描かれ、

> 我、秦の始皇、趙王を。恥かしめんと、せられしをたに。前に出て。いましめ、秦王に。缶をうたせ舞せし也。いはんや。廉頗ほどの者に。おそれんや。[36]

『廸吉録』の当該箇所の記述は、次のようである。

> 夫以秦王之威、而相如廷斥之。辱其羣臣、独畏廉将軍哉。（夫れ秦王の威を以ってしても、相如之を廷斥して、その群臣を辱しめた。独り廉将軍を畏れんや。）

とあるが、『堪忍記』の下線部「缶をうたせ舞せし也」は明らかに

[36] 同注12、p.151。

臺灣大學學術期刊資料庫

『廸吉録』にない一文である。その出典として、『太平記』巻 26「上杣畠山讒高家事付廉頗藺相如事卞和玉事」を指摘しうる。

『史記』「廉頗藺相如列伝」は主に「完璧帰趙」、「澠池之会」と「負荊請罪」などのストーリーによって構成されるものだが、『太平記』の当該話もこの 3 話の話に依拠している。そのうち、「澠池之会」の話では、秦王は趙王に瑟を演奏させ、その様子を史官に記録させることで趙王に恥をかかせようとした。これに対し、藺相如は秦王にも缶を演奏するよう強く求め、その様子を同様に史官へ記録させた。その結果、趙は秦に一方的に侮辱されることなく、両国は対等な立場で会見を終えることができた。『太平記』において、藺相如が秦王に缶を演奏させるようと追い詰める場面では、

> 秦王辞スルニ言無ケレハ、自ラ立テ寿ヲナシ撃缶ヲ舞給フ。則趙ノ左大史進出テ、其年月ノ何日ノ日秦趙両国ノ会盟アリ。趙王盃ヲ挙給フ時、秦王自ラ酌を取テ、撃缶ヲ畢ヌト、委細ノ記録ヲ書留テ、趙王ノ恥ヲソ洗ケル。

とあり、下線部は『堪忍記』の「缶をうたせ舞せし也」と似通っていることが窺える。当該内容は無論『史記』に依拠したものとも考えられるが、『史記』の当該箇所と照らし合わせると、

> 於レ是秦王不レ懌、為一撃レ缻。相如顧召二趙御史一、書曰、某年月日、秦王為二趙王一撃レ缻。（是に於いて、秦王懌(よろこ)ばざるも、為に一たび缻(ふ)を撃つ。相如顧みて、趙の御史を召し、書せしめて、曰く、某年月日、秦王趙王の為に缻を撃つ。）[37]

『史記』の下線部の「缻」は『堪忍記』の「缶」や『太平記』の「缶」の異体字である。『史記』の下線部「為一撃レ缻」は『太平記』「撃缶ヲ舞給フ」に相当する箇所だが、『太平記』の「舞給フ」は『史記』にもないオリジナルな文言であることから、『堪忍記』の「缶をうたせ舞せし也」はやはり『太平記』による可能性が高い。

[37] 水沢利忠著（1993）『新釈漢文大系』89 巻、史記 9、列伝 2、明治書院（ジャパンナレッジにて閲覧）。

臺灣大學學術期刊資料庫

以上の2例から明らかなように、了意は前節で確認した怪異性を強調する表現だけでなく、仏教や中国説話に由来する用語も『太平記』から摂取していたことが判明した。『太平記』は仏教的世界観に基づく因果応報の思想を色濃く反映した作品であると同時に、中国故事を豊富に取り入れた物語でもある。そのため、『太平記』に深く親炙していた了意[38]が『廸吉録』の話を和訳し、あるいは『堪忍記』の文章を推敲する過程で、『太平記』の表現や語彙を積極的に導入した可能性は高いと考えられる。

五、終わりに

以上、『堪忍記』「女鑑」を中心に、『太平記』の利用例を検討した。従来、『堪忍記』と『太平記』との関係はほとんど指摘されてこなかったが、了意による和訳や教訓的記述を精査することで、両者の間に看過できない関連性が存在することが明らかになった。

了意の『堪忍記』「女鑑」における和訳について、青山忠一は『廸吉録』女鑑妬毒報「梁仁裕妻捶婢脳脳亦創潰」と女鑑孝逆報「酸棗婦雷換狗頭」を取り上げ、『堪忍記』における翻訳内容と原典の差異を指摘している。青山は、「恰も怪談その儘である。こうした誇張こそ文芸と言うべきであろう」[39]「『堪忍記』は随所に描写叙述を挿入し潤色を行う」[40]と評し、了意の翻案の特徴を論じた。本稿の考察により、青山が指摘した怪談的な潤色、すなわち直訳に止まらない了意の翻訳には、『太平記』の怪異譚の文言が実際に挿入されいたことが確認できる。

---

[38] 冨士昭雄（2011）「『狗張子』の方法」『西鶴と仮名草子』笠間書院、p.140。

[39] 青山忠一（1982）「堪忍記」『仮名草子女訓文芸の研究』桜楓社、p.374。なお、青山の論文によれば、原典の「梁仁裕妻捶婢脳脳亦創潰」では、梁仁裕妻が婢を縛って頭を打っているとのみ書かれていないところを、『堪忍記』では原文にない「血のとぶ事、滝のごとく、妻が首にかゝりて」を付け加えたという。

[40] 同注 39、p.376。

臺灣大學學術期刊資料庫

なお、前掲の先行研究[41]にすでに触れたように、『太平記』巻 23「大森彦七事」や巻 20「結城入道墮地獄事」などは、了意の『狗張子』にも踏襲されている。本稿では、『太平記』巻 23「大森彦七事」の「自天井熊ノ手の如ナル」や巻 20「結城入道墮地獄事」の「月俄ニカキ陰リ、雨アラク電シテ」という表現が『堪忍記』にも取り入れられた痕跡を確認した。これにより、教訓譚である『堪忍記』と怪異譚である『狗張子』が、ともに『太平記』の怪異表現を共有する素材として活用していたことが明らかになった。

では、了意はなぜ教訓説話である『堪忍記』に『太平記』の怪異要素を翻訳に持ち込む必要があるのか。これに関して、冨士昭雄が『狗張子』の創作目的について、次のように述べられている。

> 了意にあっては怪異譚も虚妄でなく、等しく事実であり、その文学は婦女童幼の慰みに止まらず、勧懲・因果応報の理を知らしめる方便であった。[42]

ならば、了意が悪事を働いた女性が受けた報いに、『太平記』の「自天井熊ノ手の如ナル」や「つしむ」を『廼古録』の「酸棗婦雷換狗頭」「徐妻殺前児而已児継死」[43]2 話の和訳に取り入れたのも、また勧善懲悪のためであろう。

今後は引き続き女訓物における軍書の役割や了意訳『三綱行実図』をはじめとする「女訓物」をより深く検討しすることで、了意の女訓物の特徴を明らかにしていきたい。

【付記】本稿は 2025 年 11 月 8 日、政治大学で開催された「2025 國科会議外文学門成果發表会」で口頭発表した内容に加筆して、訂正を行ったものである。なお、本稿は台湾国科会研究計画「従淺井了

41 同注 38。
42 同注 38、p.146。
43 なお、この 2 話の話は後に刊行された了意最初の仏書『仏説善悪因果経直解』（1667）の巻 1 と巻 4 にも含まれている。

臺灣大學學術期刊資料庫

意之女訓文学論『列女伝』東伝」（NSTC 114-2410-H-126-004）の助成を受けた研究の一部である。

【テクスト】

朝倉治彦、深沢秋男編（1993）『鑑草』『仮名草子集成』第 14 巻、東京堂出版。Asakura Haruhiko.hukasawa Akio(1993), *Kagamigusa KaNazoshishusei* Vol.14, Tokyodoshuppan.

朝倉治彦、深沢秋男編（1997）『堪忍記』『仮名草子集成』第 20 巻、東京堂出版。Asakura Haruhiko.hukasawaakio(1993), *Kanninki KaNazoshishusei* Vol.20, Tokyodoshuppan.

『かなめいし』大洲市立図書館矢野玄道文庫所蔵・刊記不明（マイクロ請求記号：364－0204－006、国書データベース〔https://doi.org/10.20730/100227503〕）。*Kanameishi* Ozushiritsutoshokan Yanoharumichibunkoshozo Mukankibon(Micro Call number : 364－0204－006,KokushoDB〔https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100027006/〕.

『太平記』筑波大学図書館マイクロ収集　ル 140-85・慶長 15 年古活字版（国文学研究資料館マイクロ請求記号：006-0172-002、国書データベース〔https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100027006/〕）。*Taiheiki* Tsukubadaigakutoshokan Microcollection Ru140-85, Keicho15nen Kokatsujiban(Kokubungaku Kenkyushiryokanshozou Micro Call number : 006-0172-002, KokushoDB〔https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100027006/〕).

『迪吉録』国立公文書館所蔵、明崇禎 4 年版（請求番号：子 077-0009）国立公文書館 DA〔https://www.digital.archives.go.jp/img/4431511〕。*Tekikichiroku* Kokuritsukobunshokanshozo, Min Sutei4nen version(Call number:Shi077-0009) 国立公文書館 DA〔https://www.digital.archives.go.jp/img/4431511〕.

臺灣大學學術期刊資料庫

松尾聡、永井和子校注・訳（1997）『枕草子』『新編日本古典文学全集』18、小学館。Matsuo Satoshi.Nagai Kazuko(1997), *Makuranososhi Shinpennihonkotenbungakuzenshu* Vol.18, Shogokukan.

水沢利忠著（1993）『新釈漢文大系』89 巻、史記 9、列伝 2、明治書院（ジャパンナレッジ版）。Mizusawa Toshitada(1993),*Shinshaku kanbuntaikei* Vol89, Shiki9, retsuden2, Meijishoin(Japanknowledge lib Version).

【参考文献】

青山忠一（1982）『仮名草子女訓文芸の研究』桜楓社。Aoyama Chuiichi(1982), *Kanazoshi jokumbungei no kenkyu*, Ofusha.

小秋元段（2013）「『太平記』における歴史叙述と中国故事」『日本学研究』23、北京日本学研究中心。Koakimoto Dan(2013), *Taiheiki Ni okeru rekishijojutsu to chugokukoji,* Nihonbungakukenkyu Vol.23, Pekinnihongaku kenkyuchushin.

朝倉治彦、深沢秋男編（1997）「堪忍記解題」『仮名草子集成』第 20 巻、東京堂出版。Asakura Haruhiko. hukasawaakio(1993), *Kanninkikaidai,* KaNazoshishusei Vol.20, Tokyodoshuppan.

江本裕（2000）「了意怪異談の素材と方法」『近世前期小説の研究』近世文学研究叢書 12、若草書房。Emoto Hiroshi(2000), Ryoikaidan no sozai to hoho, *kinsei zenkishosetsu no kenkyu*, Kinseibungakukenkyusosho12,Wakakusashobo.

大久保順子（2021）「『本朝女鑑』と軍記―女性逸話の形成と展開の関して」『文藝と思想』第 85 号、福岡女子大学。Okubo Junko(2021), *Honchojokan* to gunki-Joseiitsuwa no keisei to denkai ni kanshite, *The essays in literature and thought Studies in the humanities* Vol.85, Hukuokajoshidaigaku.

小川武彦（1976）「『堪忍記』の出典」上の一」『近世文芸研究と評論』10 号、早大文学部暉峻研究室。Ogawa Takehiko(1976), *Kanninki* no shutten jonoichi, *kinseibungei kenkyu to hyoron* Vol.10, Sodaibungakubuteruokakenkyushitsu.

臺灣大學學術期刊資料庫

小川武彦（1977）「『堪忍記』の出典」上の二」『近世文芸研究と評論』13 号、早大文学部暉峻研究室。Ogawa Takehiko(1977), *Kanninki* no shutten jononi, *kinseibungei kenkyu to hyoron* Vol.10, Sodaibungakubu teruokakenkyushitsu.

木村廸子（2015）「浅井了意『密厳上人行状記』について：典拠・執筆姿勢・影響」『近世文芸』101 号、日本近世文学会。Kimura Michiko(2015), Asai Ryoi *Mitsugenshoningyojoki* ni tsuite: tenkyo, shippitsushisei, eikyo, *Kinseibungei* Vol.101, Nihonkinseibungakkai.

白川静（1996）『字通』平凡社（ジャパンナレッジ版）。Shirakawa Shizuka(1996), *Zitsu*,Heibonsha(Japanknowledge lib Version).

谷脇理史・岡雅彦・井上和人校注・訳者（1999）『仮名草子集』『新編日本古典文学全集』64、小学館。Taniwaki Masachika. Oka Masahiko. Inoue Kazuto(1999), *Kanazoshishu*, *Shinpen nihonkotenbungakuzenshu* Vol.64, Shogakukan.

築島裕編（2007～2009）『訓点語彙集成』汲古書院。Tsukishima Hiroshi(2007～2009), *Kuntengoishusei*, Kyukosyoin.

土屋順子（1999）「『狗張子』考―巻二―五「形見の山吹」を中心に―」『大妻国文』第 30 巻、大妻女子大学国文学会。Tsuchiya Junko(1999)*Inuhariko* kou-makininigo Kataminoyamabuki wo Chushinni-, *Ozumakokubun* Vol.30, Ozumajoshidaigakukokubungakkai.

董航（2019）「浅井了意における孝道論：『堪忍記』を中心に」『成蹊国文』52 号、成蹊大学文学部日本文学科。Toko(2019), *Asai Ryoi ni okeru kodoron:Kanninki wo chushin ni , Seikeikokubun Vol,52,Seikeidaigakubungakubu nihonbungakuka.*

董航（2024）「浅井了意の仮名草子が語る日本善書文化の展開―『堪忍記』『浮世物語』の流伝を例に―」『日本文化学報』第 102 輯、韓国日本文化学会。Toko(2024), *Asai Ryoi no kanazoshi ga Kataru nihonzenshobunka no tenkai-Kanninki Ukiyomonogatari no*

臺灣大學學術期刊資料庫

ryuden wo rei ni, Nihonbunkagakuho Vol.102, Kankokunihonbungakki.

日本国語大辞典第 2 版編集委員会（2000～2002）『日本国語大辞典』第 2 版、小学館（ジャパンナレッジ版）。Nihonkokugodaiziten Dainihan Henshuiinkai（2000～2002）, *Nihonkokugodaiziten dainihan*, Shogakukan.(Japanknowledge lib Version).

日本古典文学大辞典編集委員会編集（1983）『日本古典文学大辞典』第 1 巻、岩波書店。Nihonkotenbungakudaiziten Henshuiinkai(1983), *Nihonkotenbungakudaiziten* Vol.1, Iwanamishoten.

日本古典文学大辞典編集委員会編集（1984）『日本古典文学大辞典』第 2 巻、岩波書店。Nihonkotenbungakudaiziten Henshuiinkai(1984), *Nihonkotenbungakudaiziten* Vol.2, Iwanamishoten.

長谷川端校注・訳者（1994）『太平記』4『新編日本古典文学全集』64、小学館。Hasegawa Tadashi(1994), *Taiheiki ,Shinpen Nihonkotenbungakuzenshu* Vol.64, Shogakukan.

花田富二夫（1997）「浅井了意の文事―『堪忍記』を中心に―」『近世文学俯瞰』、汲古書院。Hanada Hujio(1997), Asai Ryoi no Bunzji-*Kanninki* wo chushinni-, *Kinseibungaku hukan*, Kyukosyoin.

花田富二夫（2003）「『堪忍記』とその周辺」『仮名草子研究―説話とその周辺―』新典社研究叢書 151、新典社。Hanada Hujio(2003), *Kanninki* to sono shuhen, *Kanazoshikenkyu-setsuwa to sono Shuhen-*, Shintenshasosho151, Shintensha.

冨士昭雄（2011）「浅井了意の怪異小説」「『狗張子』の方法」『西鶴と仮名草子』笠間書院。Huzi Akio(2011), Asai Ryoi no Kaishosetsu, *Inuhariko* no hoho, *Saikaku to Kanazoshi*, Kasamashoin.

濱田啓介（1993）「刊行の為ための虚構の発生―本朝女鑑の虚構」『近世小説・営為と様式に関する私見』、京都大学学術出版社。

臺灣大學學術期刊資料庫

Hamada Keisuke(1993), Kanko no tame no kyoko no hassei, *Kinseishosetsu・eii to yoshiki ni kansuru shiken*, Kyotodaigakushuppansha.

吉江久彌（1990）『西鶴文学とその周辺』新典社研究叢書 33、新典社。Yoshie Hisaya(1990), *Saigaku bungaku to sono shuhen*, Shintenshasosho33, Shintensha.

臺灣大學學術期刊資料庫